

第V章 宮古の主要グスクの内容

1. オイオキ原遺跡

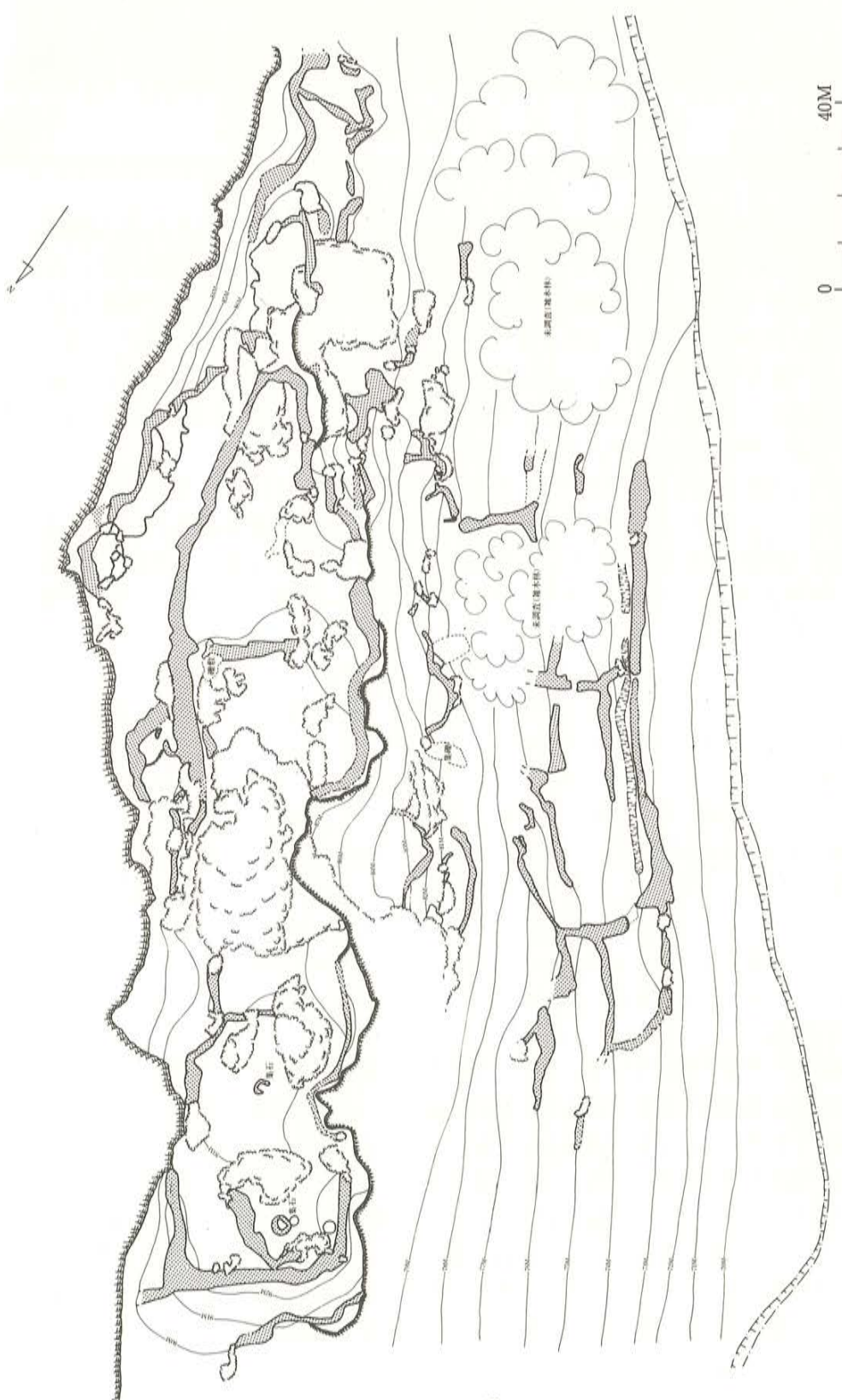
オイオキ原遺跡は標高94mを最高所とする琉球石灰岩丘陵上に形成されている。北側は急峻な崖状をなし、海岸へ延びていく。南側には段状になりゆるやかな傾斜面となっている。南側から望むとほぼ台形状の地形をなす。最上担部からは視界が広く北は島尻方面、西は伊良部島、東は城辺の高腰のあたりまで遠望することができる。北側海岸からの吹上の風が強い為大きな樹木等の生育は少なく底灌木（シャリンバイ、アダン、カヤ）に覆われている。東西に三角形に長くなっており、上担部だけで東西100m×南北30mとなっている。中央部で岩が突出し東西にフラットな面を作る。

城内はあちこちに小さなくぼ地があり、その周縁部を石で囲んだものもみられる。また、上担部や崖下においては、暗褐色の土壌が堆積しており土器や陶磁器が採集される。上担部での試掘では鉄製の刀子が出土した。形状は沖縄本島のグスクから出土する資料に概ね類似する。陶磁器の資料では16世紀の青磁碗が含まれており、土器では鍋形（外耳）や壺形の器形をなすものがある。

石積みは全て野面となっており、上担部では丘陵の縁辺に沿って取り囲んである。縁辺部でも低くなっている部分は高く岩と岩の隙間を埋めるように積まれている。したがって内側から見れば1m前後の高さでも外側から見ると2～3mとなっている。石垣の基礎の部分では、幅が広くとられており、斜面全体に石が取り巻いているようにも見える。あるいは積み上げた部分が崩落し下の部分まで厚みを増している状態であったかもしれない。今後、さらに検討する必要がある。また、内部の方では段状になった境から石を積んであり、明らかにフラット面ごとに区分けした状態となっている。このように最頂部の部分を積んだばかりでなく、丘陵の底辺部にも小さなフラット面を作る形で石を積んであるのも見られた。高さはさらに低く内側からは50～60cm前後、外側からは約1m前後となっている。いずれも小さな不定形な囲みが出来ており、どのような機能、施設が存在していたのか検討がつかない。

特に南側においてよく残っている。フラット面中心に見ると上担部、中担部、下担部として分けることが出来それぞれの縄張りで石が積まれている。上担部の西側よりには円形状に石を積み上げたところがあり拝所として捉えられるものである。

図版23は石積みが高く最もよく残っている部分であるが、岩と岩の隙間をきっちりとめあわせて壁を作っている。野面積みの中でもやや荒い積み方となっている。その脇を登って上担部に入っていた可能性がある。立地、地形等から見る限りにおいては、沖縄本島及びその周辺離島において見られるグスク遺跡に類似するものがあり今後、宮古地区の中におけるグスク遺跡の形態分類の一つの指標になるものと考えられる。



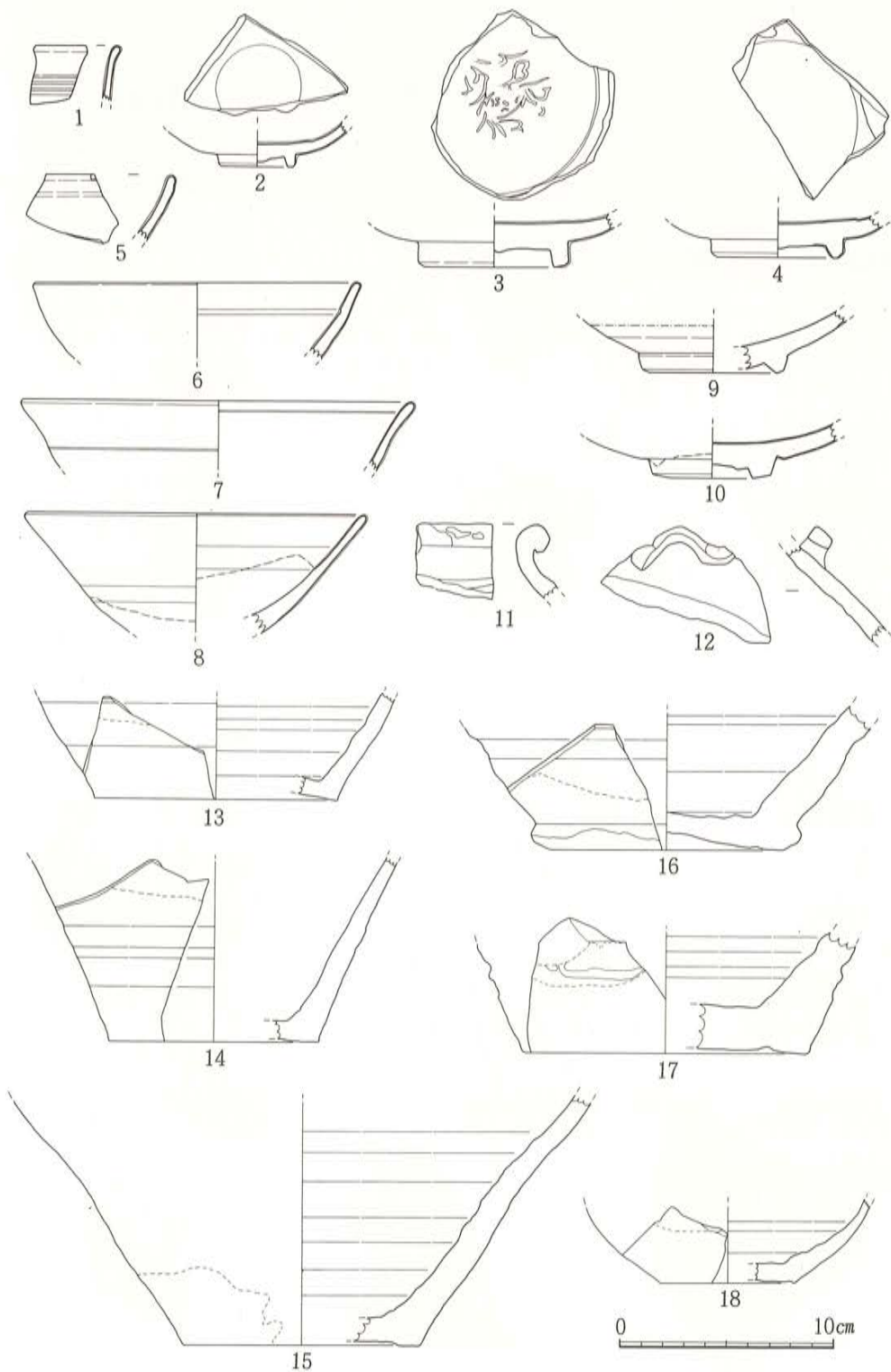
第39図 オイオキ原遺跡縄張り測量図



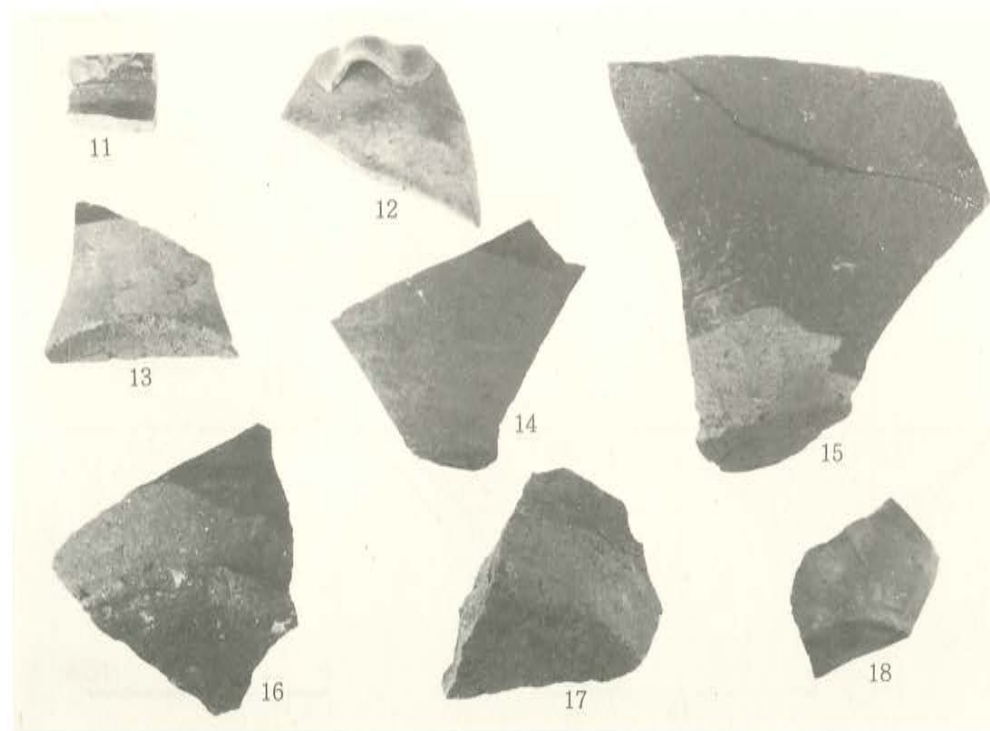
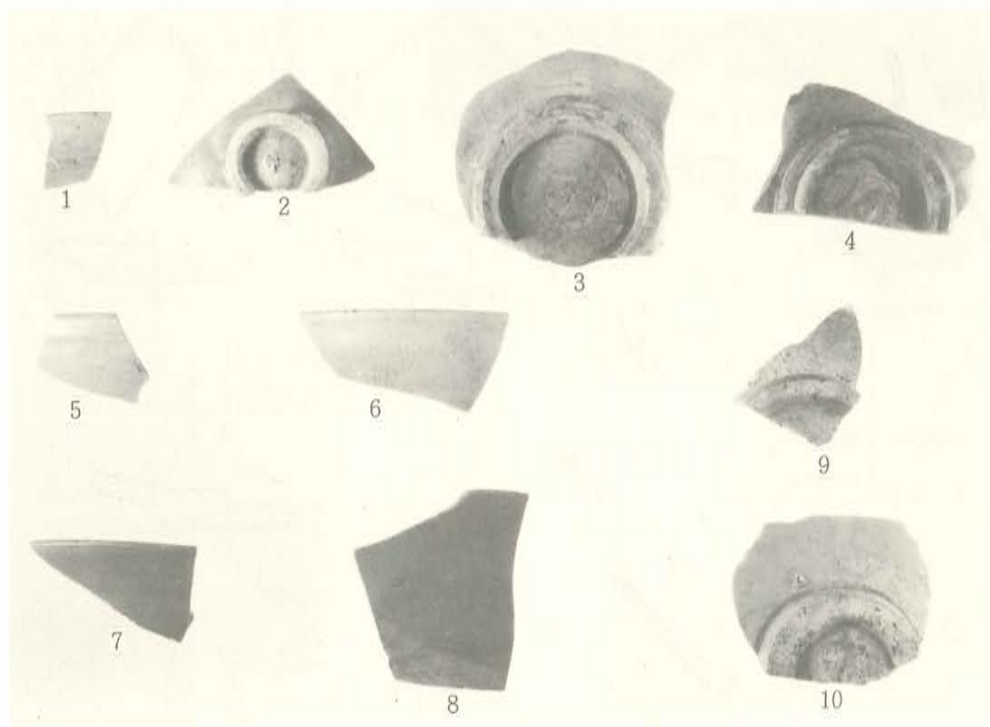
図版22 上、最上担の郭
下、同 上



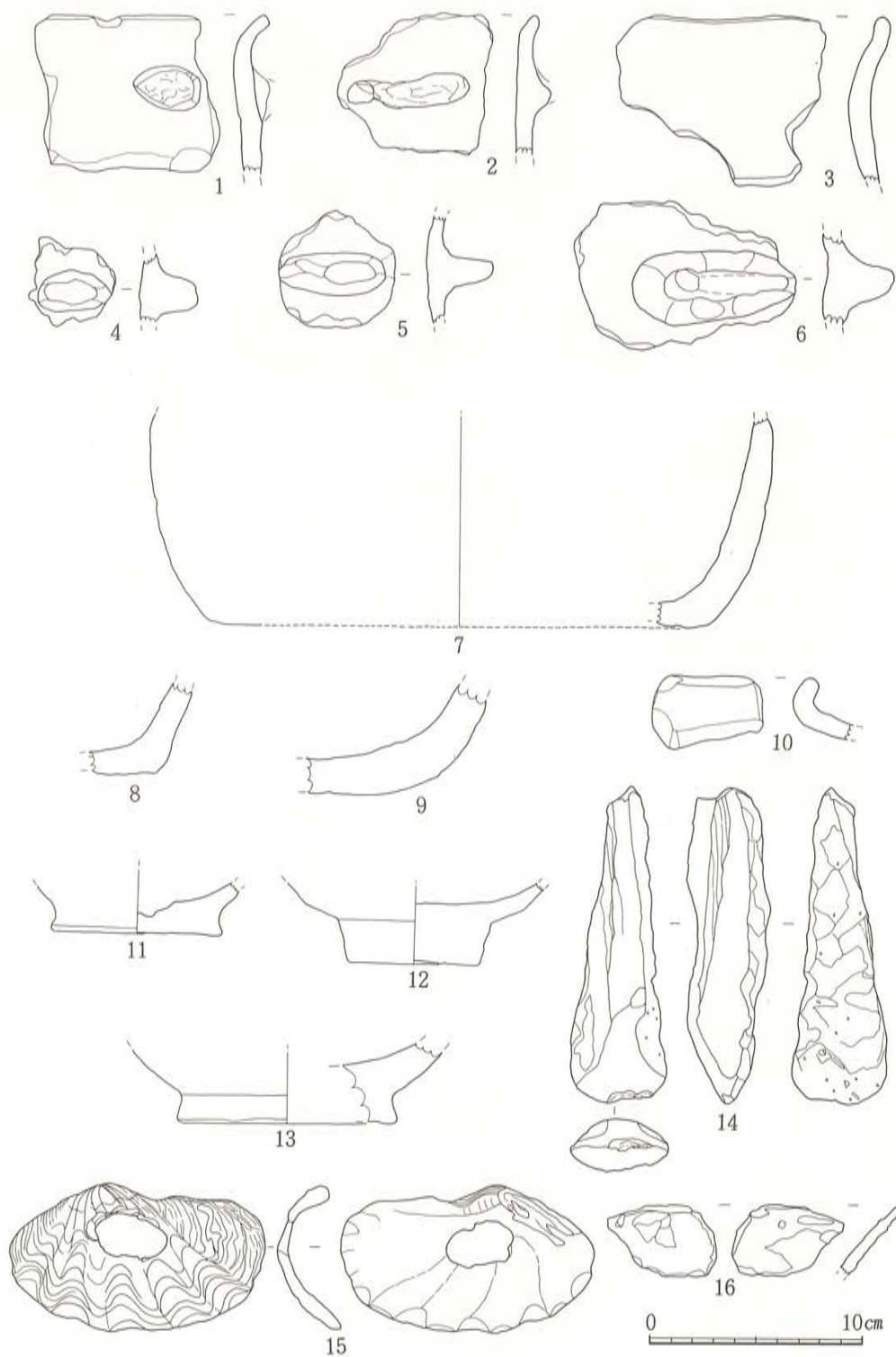
図版23 上、南側に取り巻く石積み
 下、同 上



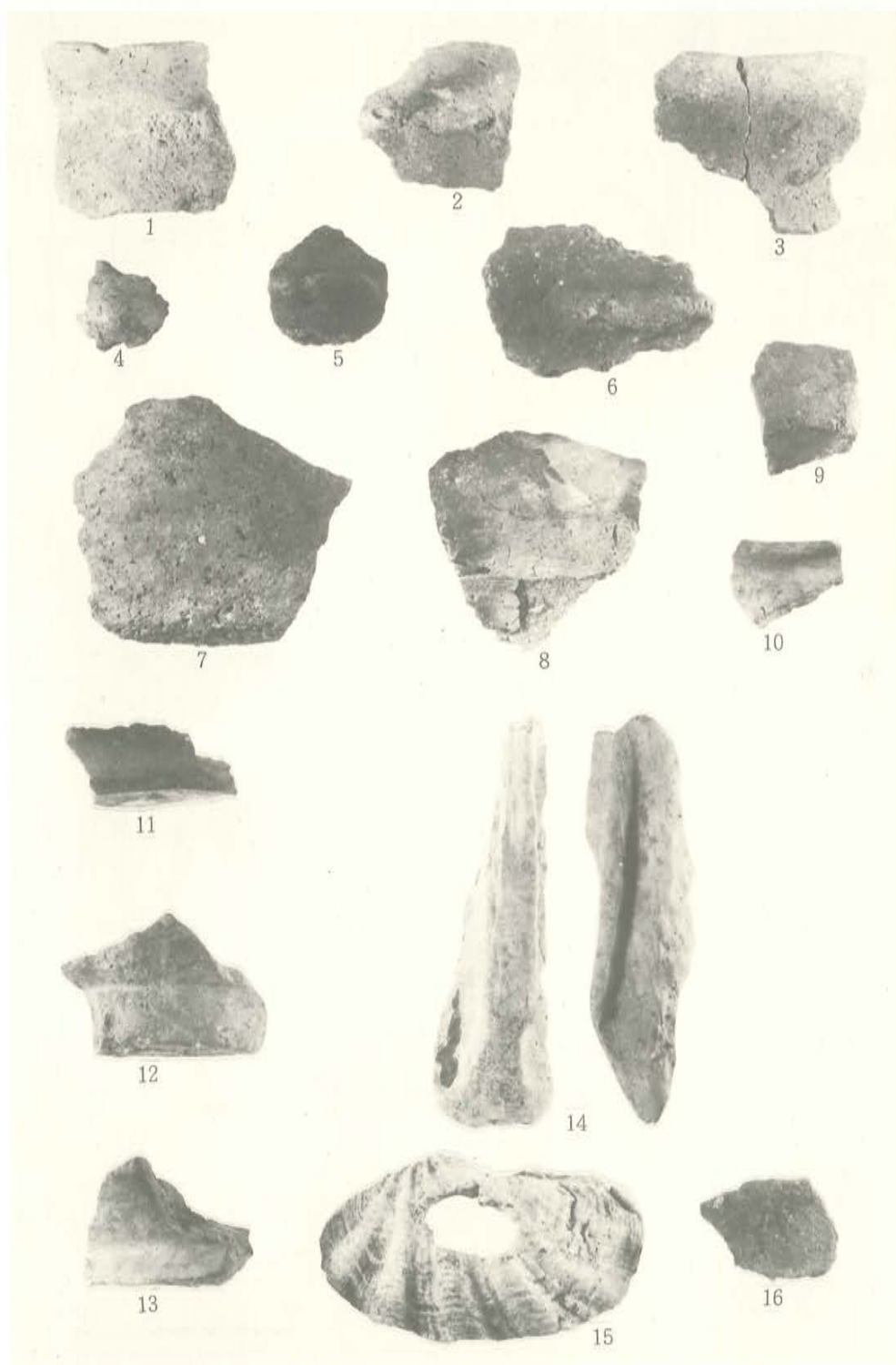
第40図 オイオキ原遺跡採集遺物（1～4. 青磁、5～10. 白磁、11～17. 褐釉陶器壺、18：褐釉陶器茶入れ壺）



図版24 オイオキ原遺跡採集遺物



第41図 オイオキ原遺跡採集遺物 (1~13. 土器、14 : シャコ貝製貝斧、
15 : シャコ貝有孔製品、16 : 鉄鍋)



図版25 オイオキ原遺跡採集遺物

2. 箕島（ムイズマ）遺跡

城辺町字仲原に所在する。仲原部落の南東側を南北に延びる標高65m前後の丘陵上に形成されている。本丘陵の端は海に迫り、その部分を通り海岸道路が東西に走る。海岸は切り立った断崖が続いている。

本遺跡は丘陵に沿ってみられる農道から崖側（東側）へ石垣の部分が確認され、農道の西側にある畑地では包含層が露出しており、遺物の散布も顕著である。今回の分布調査の一環で部分的に石垣が確認されている崖側全体の伐採を行い、全体図（平板測量）を作成するとともに試掘も合わせて実施した。以下、調査の概要について簡単に述べる。

本遺跡が立地する丘陵は南西側に緩やかな斜面が広がり、北東側は急斜な崖になっている。南西側に展開する緩斜面の上部の畑地では包含層と考えられる黒色土がみられ、遺物も多く散布している。この緩斜面のほとんどが畑地（サトウキビ畑が多い）として利用されている。この緩斜面は約1km付近のところから次第に高くなっていき、箕の済村跡遺跡の所在する丘陵（標高90m前後）に至る。その丘陵の延長線上の海岸（箕島の南西約1km）にはムイ川がある。北東側の崖下も畑地が多く、約500m東には同じような方向へ走る丘陵が位置する。そのため南西側の方の視野が広がっている。

丘陵部は一部に石垣が確認されたが、モクマオウ・アダン・ススキ・サルカキミカンなどが密生しており、伐採を行い石垣の広がりを追いかけていった。そうすると遺跡の範囲は予想外の広さあり、遺跡全体の状況をつかむのは2年度にまたがってしまった。



図版26 遺跡遠景

まず、石垣の確認されている所（海岸道路から約100m陸側へ入った所）を目安にして伐採作業を開始した。伐採していくと一回りする石垣と東西方向へ延びる石垣が確認できた。西側の方へ石垣を追いかけて、その後東側へ作業を進めた。その結果、伐採作業を着手した所から西側へ約110m、東側へ約120m石垣が延びていることが判明した。しかし、東側はさらに延びており、その部分については次年度に持ち越すことになった。南北方向の範囲は丘陵の南西側の面標高60m前後のところにみられる農道（遺跡への進入路として利用）から北東側の崖面までで、最も幅のあるところで約70mを測る。

2年目は東側への石垣の延びを追いかけるとともに4ヶ所の試掘を行った。石垣は大きく露頭している琉球石灰岩の岩盤に接続するように廻らされて終結していた。今回の調査により東西の範囲も確認された。本遺跡の範囲は南北約70m、東西約300mに及ぶことが判明した。試掘は石垣の確認された場所のほぼ中央、東側の一段高くなった所に2ヶ所、西及び北西側に各1ヶ所の4ヶ所において実施した。

試掘した4ヶ所はいずれもそれほど深くなく、20～30cmほどで地山の赤土に達する。土器・輸入陶磁器のほか滑石製品が1点得られている。貝類・獣魚骨類は少なく、後者はウシの骨が多いようである。また、調査の最中に地表面にも注意をはらったが、石垣部で若干遺物が採集できただけで、それ以外ではほとんど遺物の散布はみられなかった。



図版27 作業風景

遺跡の状況

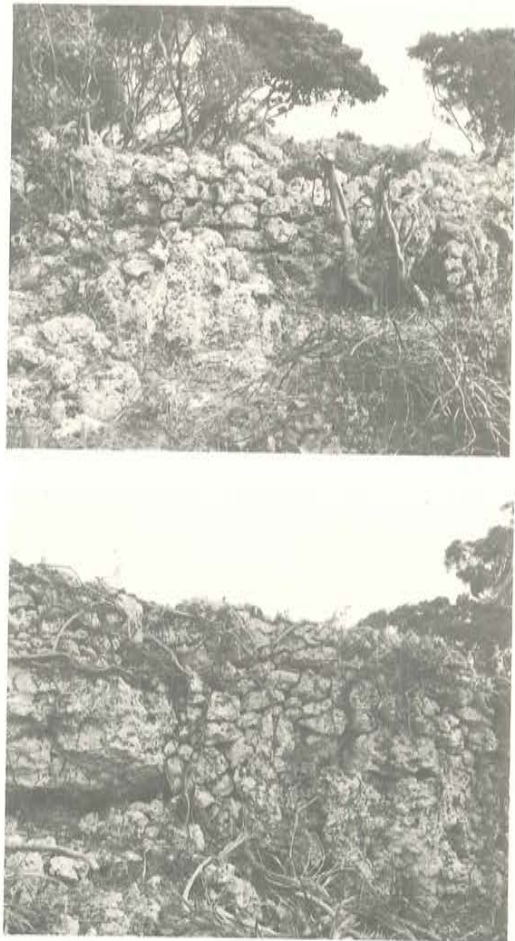
2年度にまたがって行った伐採作業により、本遺跡の範囲が明確にされた。その結果、遺跡地全体がフラットな面を形成するわけではなく、緩やかな斜面部やいたる所に露頭している琉球石灰岩の岩盤などをうまく取り込んで石垣を廻らしていることが判明した。

石垣は野面積みで一部に高く残っているが、全体的にみると保存上態はよくない。遺跡の中央部から北側では比較的フラットな面がみられ、そこでは割りと広く囲んでいるが、南側の斜面地においては細かく区切っている。ひとつの区画はできるだけ平坦になるように石垣を廻らしているように思われる。

石垣囲いの形状をみると、遺跡のほぼ中央に略長形状の区画が二重にあり、南側・北側へ略形状の区画が広がる。北端側のものは三角形の囲いになっている。それぞれの石垣囲いの大きさをみると、中央の略長形状を呈すもののうち東側のものは東西約20m、南北約50mで、西側のものは東西約25m、南北約80mである。この長形状の区画に南接する略形状のものが、一辺約40mの広さを有し、南側の細かく区切られた所で一辺が約15mである。

北側のものをみると中央寄りのものが一辺約25mあり、それに隣接するものは東西が約25m、南北が約35m、東側の小さなものが一辺15mとなっている。北端部のもは南側が底辺となる二等辺三角形に石垣が廻らされ、底辺部の長さ約25m、底辺から頂部までの長さ約50mである。その北側にも岩盤を利用して方形状に石垣を廻らした所（10m前後の幅）や岩盤と岩盤をつなぐように石垣が配される所などがみられる。

遺跡のほぼ中央に位置する一段高くなった所（南北約20m、東西約50m）は比較的フラットな面を形成するが、岩盤の露出している所も少なくない。岩盤を利用して石垣が廻っており、西側は高く積まれている。残り具合も比較的良好である。南西側と北側に石垣の途切れた部分が1ヶ所づつ見受けられる。本区



図版28 遺跡内の状況

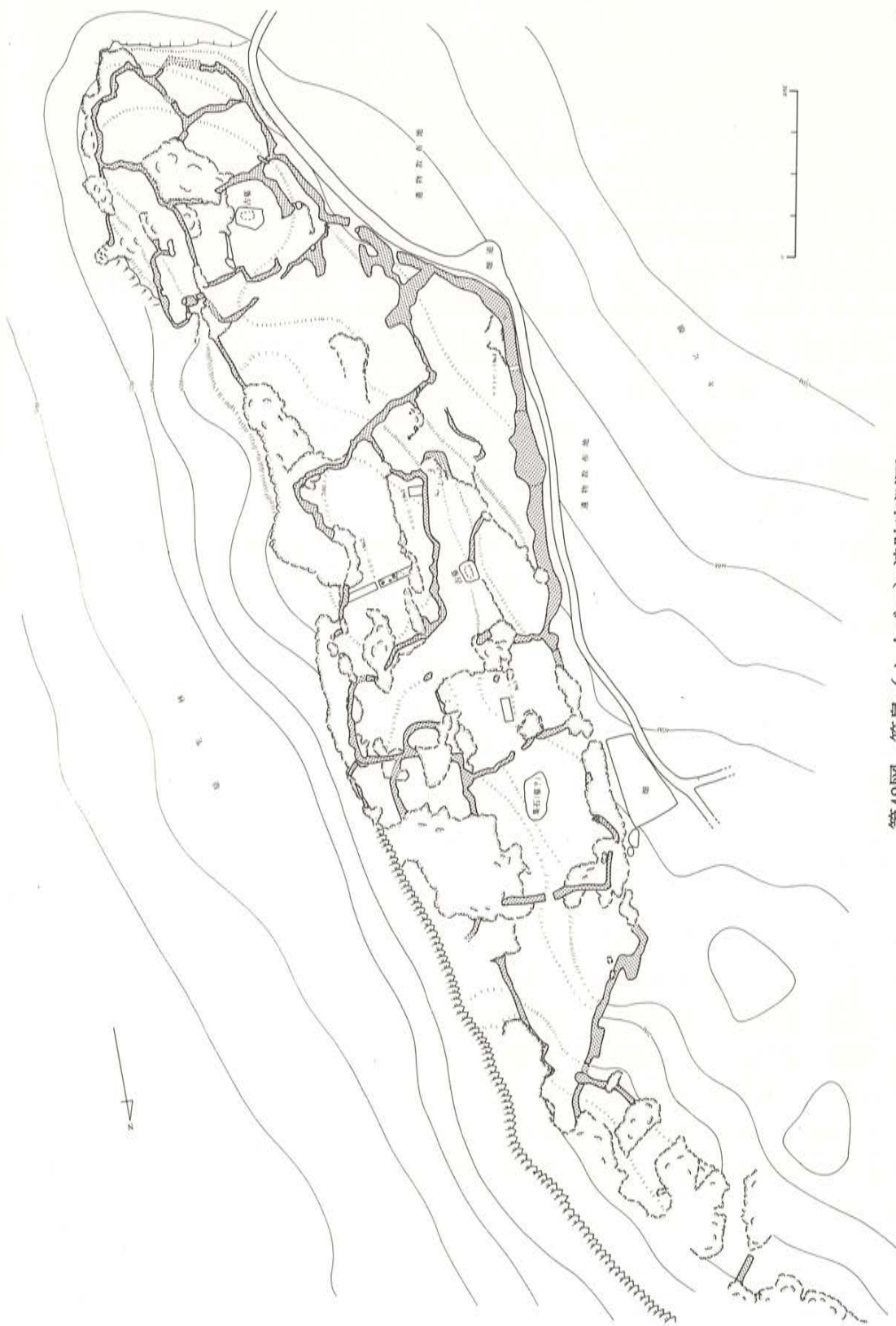
画内の2ヶ所に試掘穴を設けて発掘を行ったが、明確な包含層や遺構などは確認されなかった。

それを囲むように配される低い段の区画内は緩やかに西へ傾斜している。数段の石積みが見られる部分や岩盤の露出により、部分的に小さな段をつくる。この段の北東寄りの所には石を方形状に積んだ墓（ミヤーカ）と考えられるものも1基見受けられた。この段の石垣（外側の石垣）はほとんど崩れ落ちているものの、その状況からすれば本遺跡の中でもしっかりしたものであったかと想定される。

北側の石垣をみると遺跡内を行き来できる門のようなもの（石垣の途切れた部分）のほか、外側を廻る石垣にも積み石の途切れる部分が見られるが、南側では見受けられず全体としては判然としなかった。また、南側の石垣で細かく区切られた所でも墓（ミヤーカ）と考えらる長方形の石積み部が見られた。



図版29 遺跡内の状況



第42図 箕島（ムイズマ）遺跡実測図

遺 物

今回得られたものは農道西側畑地からの表面採集資料、石垣がみられる地域からの表面採集及び試掘による資料があり、それぞれの資料について簡単に述べる。なお、特徴的なものを第43図～第45図に示した。

西側畑地からの採集資料には青磁・染付け・褐釉陶器・須恵器・鉄製品などがある。青磁はほとんど15世紀前後のもので、1点ずつ得られている須恵器・染付けは時期幅を示しているようである。鉄製品は鍋の破片かと思われるものが数点得られている。

石垣が廻る所からの表採資料には青磁・白磁・褐釉陶器・土器・須恵器などがある。青磁は碗だけで、概ね14～15世紀頃のものかと考えられる。白磁は点数はすくないがビロースクタイプの碗と考えられる。褐釉陶器は口縁部の資料をみると頸部がやや長い縦耳のもの、頸部の短い横耳のものがみられる。土器は横耳の付される鍋形のものが多く、壺形は少ない。須恵器は1点だけ得られている。

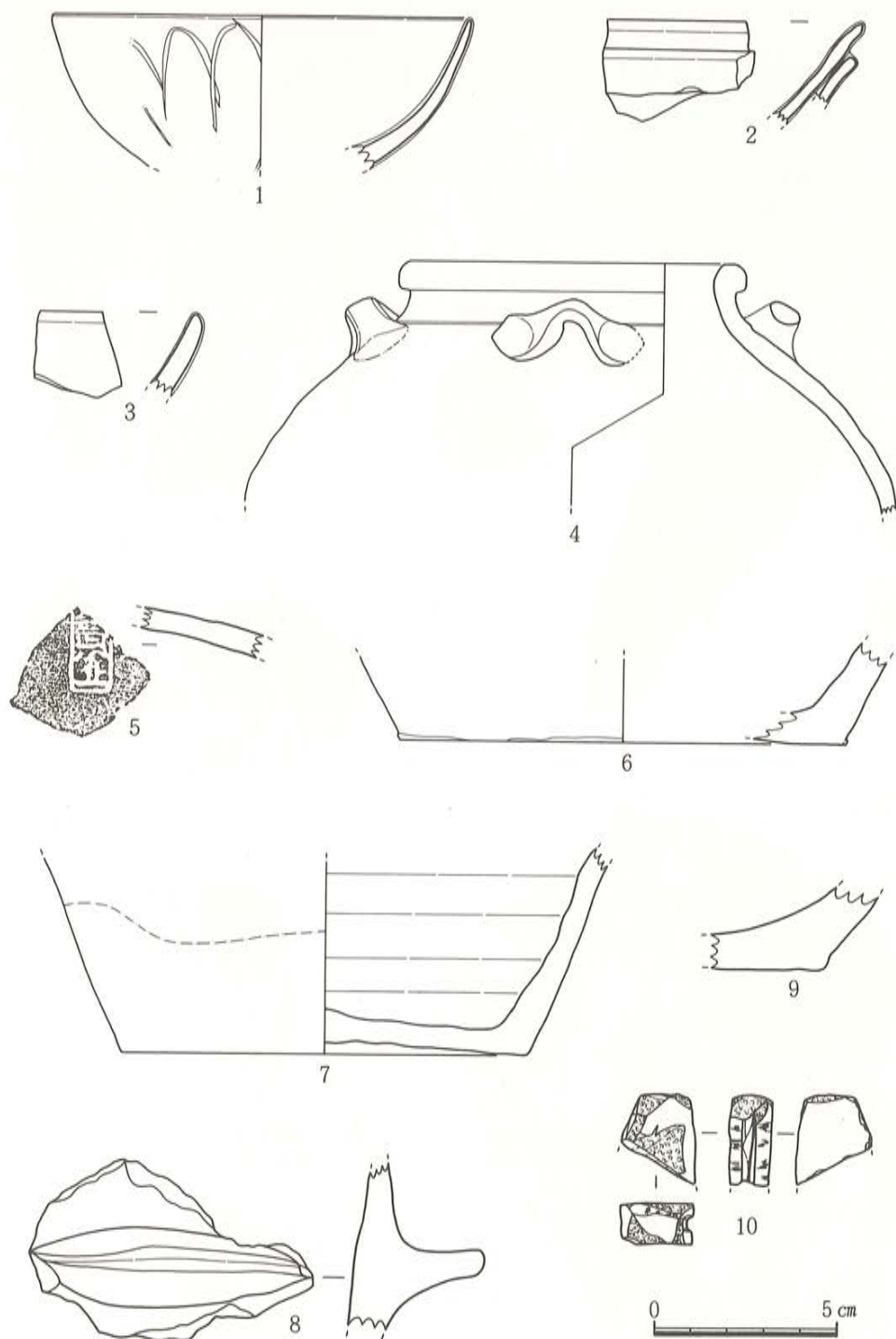
試掘によって得られたものには、青磁・白磁・褐釉陶器・土器・滑石製品・鉄製品などがある。青磁のなかに1点だけ14世紀に属すかと思われる蓮弁文碗の口縁部が含まれる。白磁は小破片ながらビロースクタイプの口縁部が見受けられる。褐釉陶器は口縁部が玉縁状に肥厚するものがみられる。土器は横耳を付した鍋形の資料が1点あり、壺形の資料も1点みられる。

注目されるものは滑石製品である。滑石製鍋の破片を利用しており、両面はその時の面を残している。割れ面をかるく研ぎ、一方の割れ面のほぼ真ん中に5mmほどの溝を設ける。破損しているため全体形や詳細については不明。

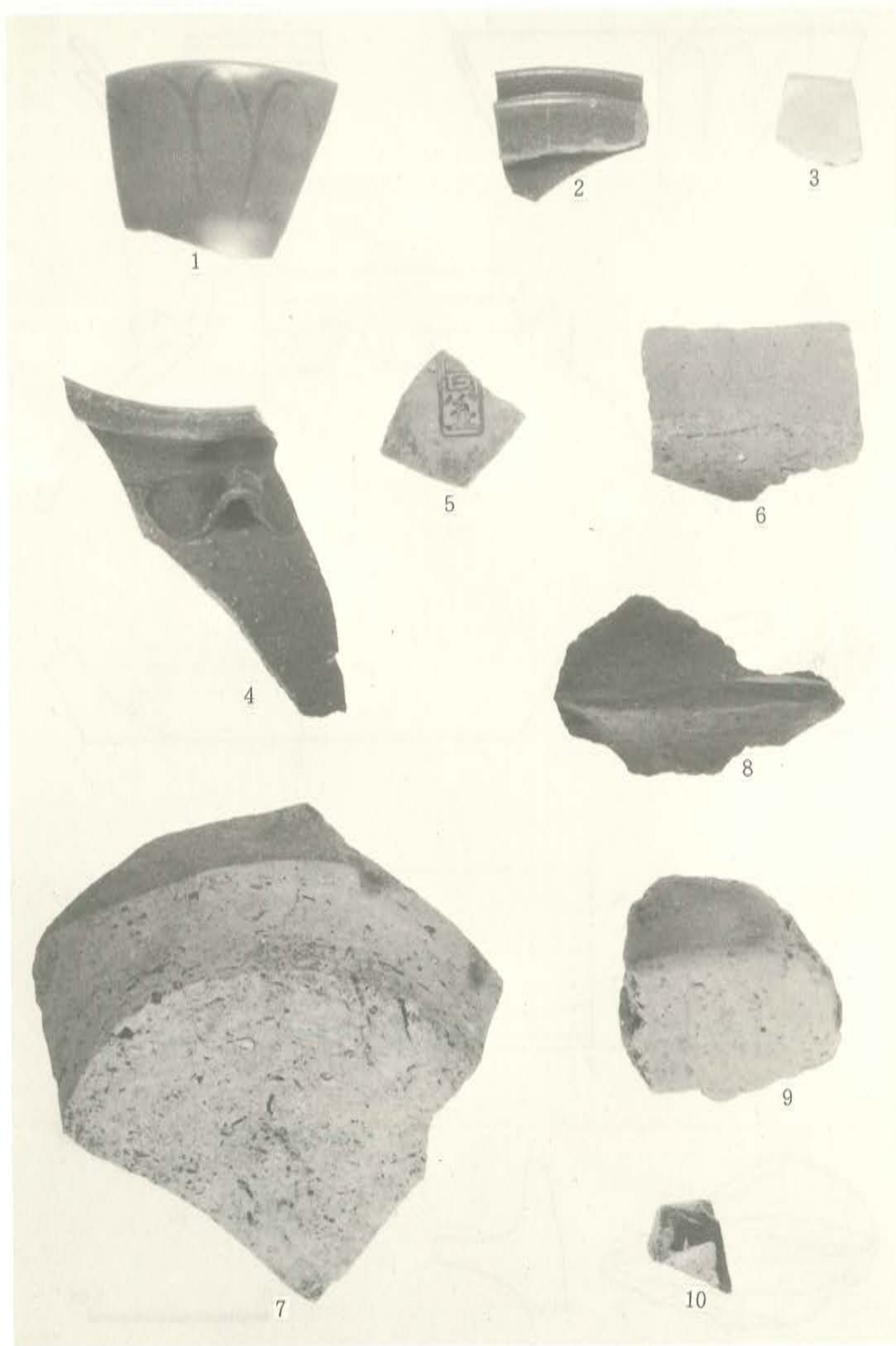
鉄製品は板状の小破片が若干得られている。

以上、今回の調査の概要を述べてきたが、ここで若干のまとめをしておく。石垣の廻られる範囲は東西約350m、南北約70mを有することが判った。その中で露頭している岩盤をうまく利用し、地形をみながら石垣を廻らしている。伝承では首長のいる村跡の話が残っているようであるが、遺跡そのものの性格についてははっきりしなかった。

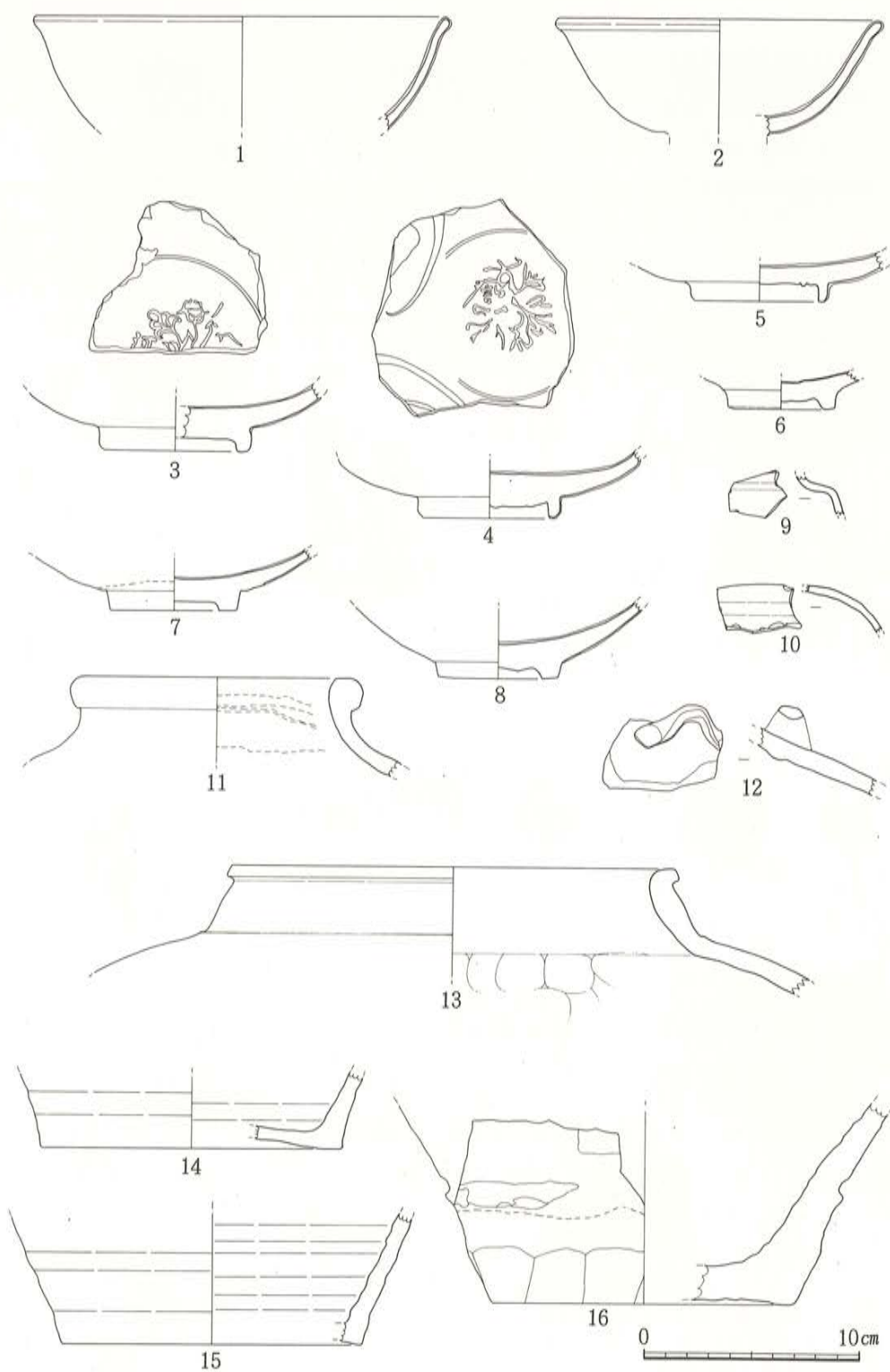
時期的な面からみると、採集された遺物から14世紀前後かと考えられるが、須恵器・滑石製品なども得られており、もう少し古くなる可能性もある。遺物の面からは土器では野城式と呼称されるものに含まれるかと考えられるものが目につき、褐釉陶器では茶入れ壺の資料が比較的目に付いた。また、これら遺物の招来されたルートなど今後に残された課題も多い。



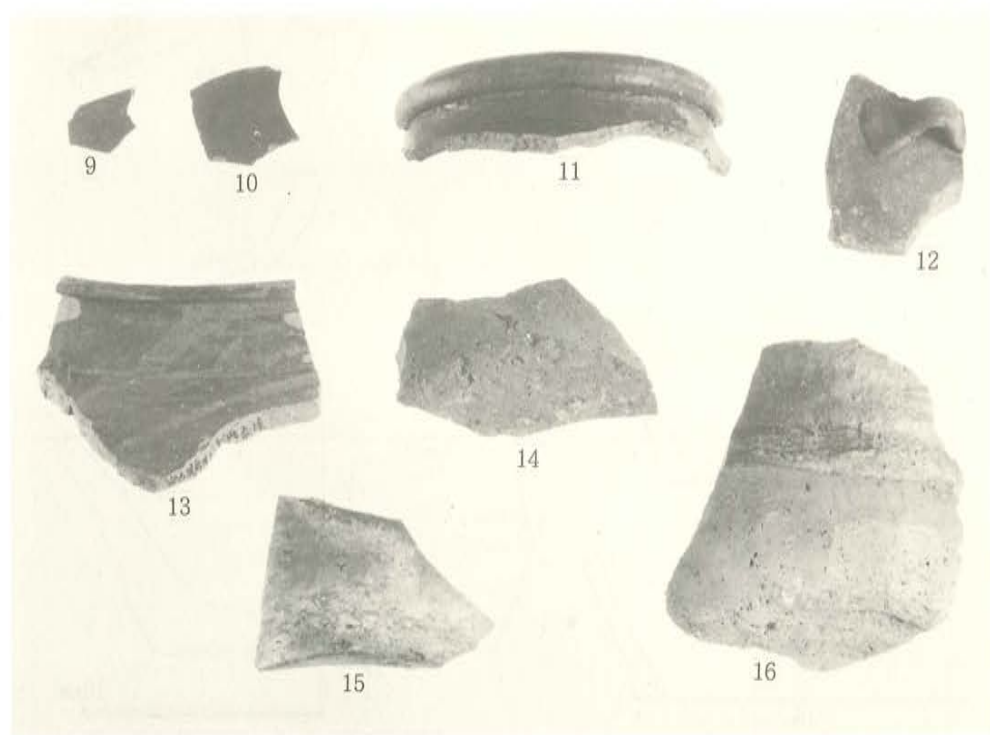
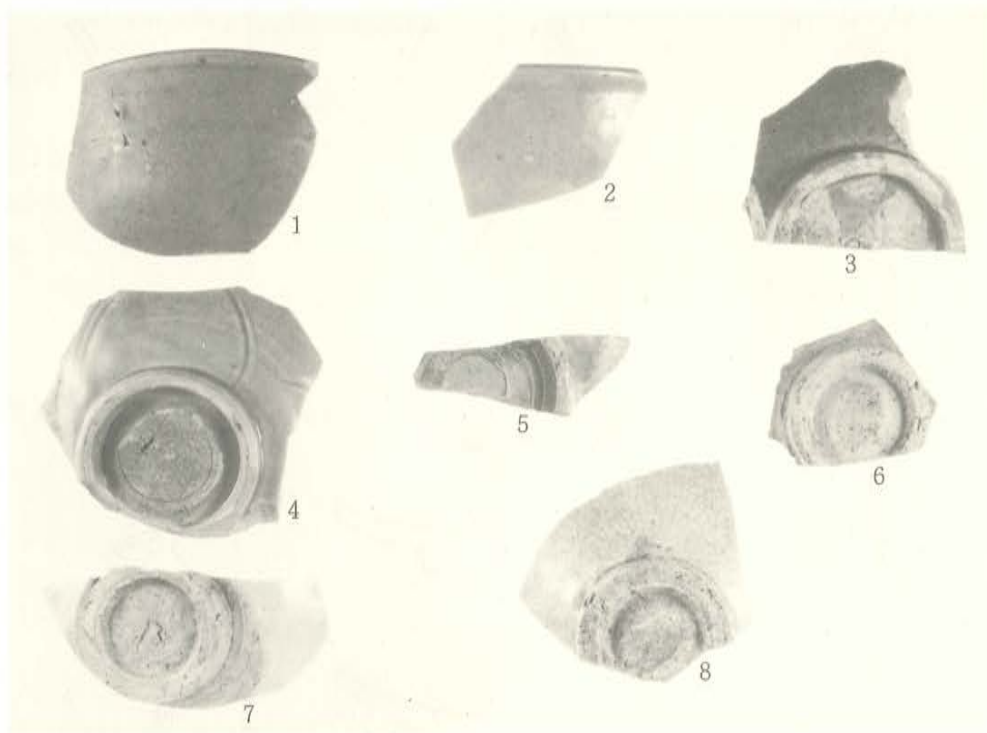
第43図 箕島（ムイズマ）遺跡出土遺物（1・2：青磁、3：白磁、4～7：褐釉陶器、8・9：土器、10：滑石製品）



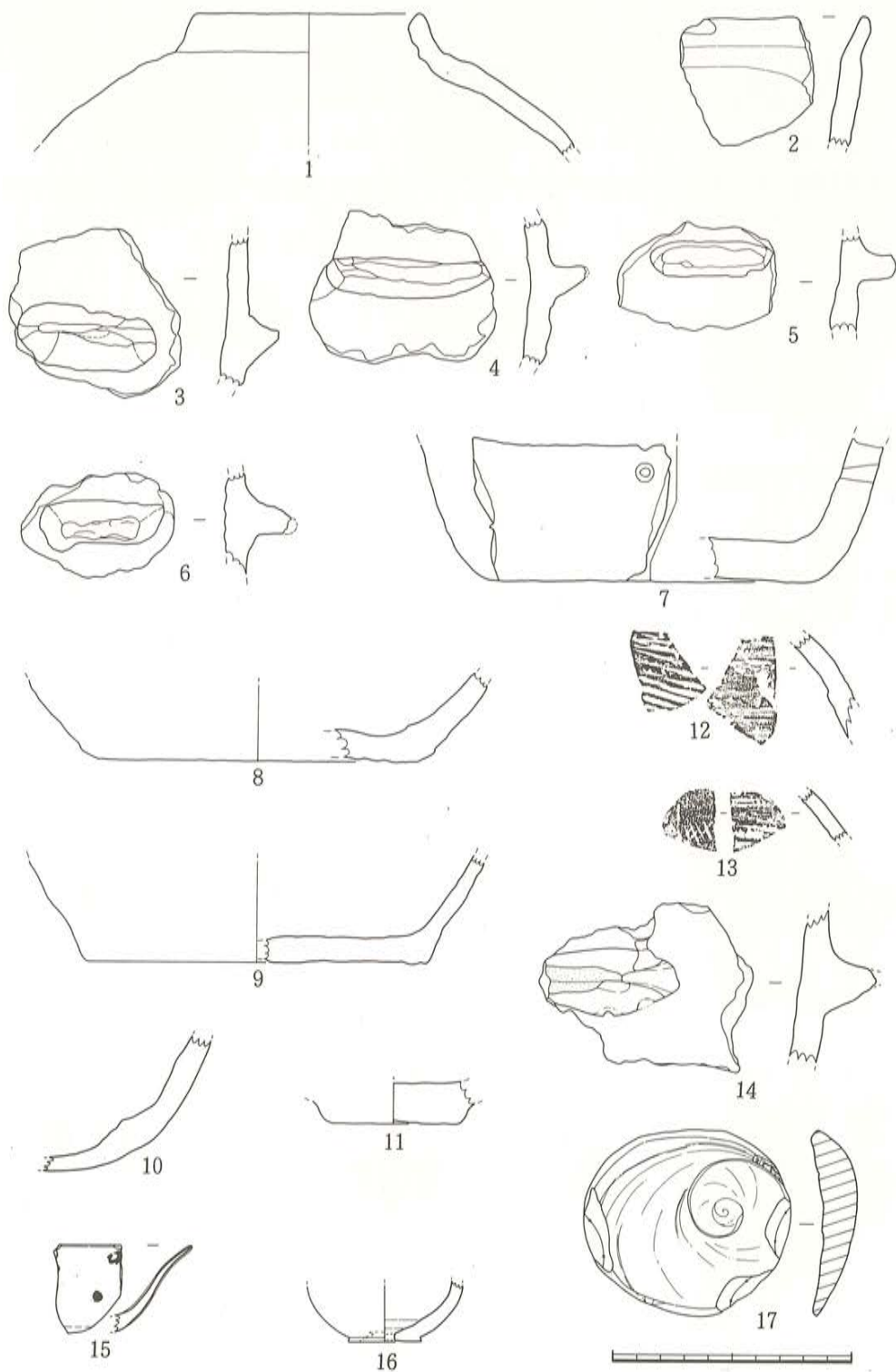
図版30 箕島（ムイズマ）遺跡



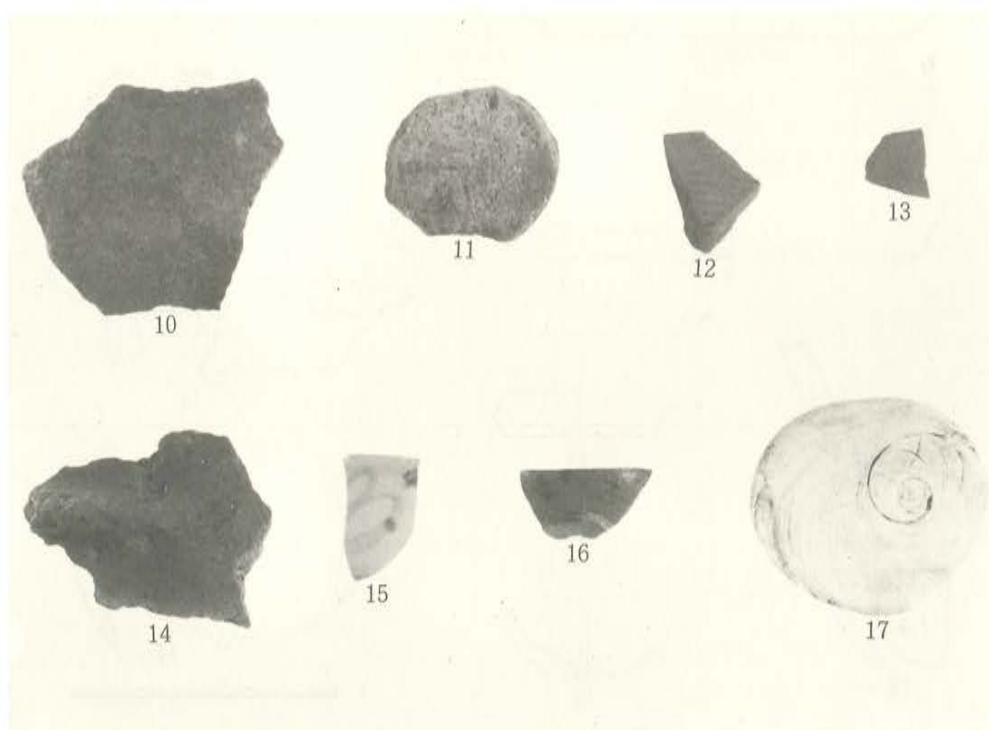
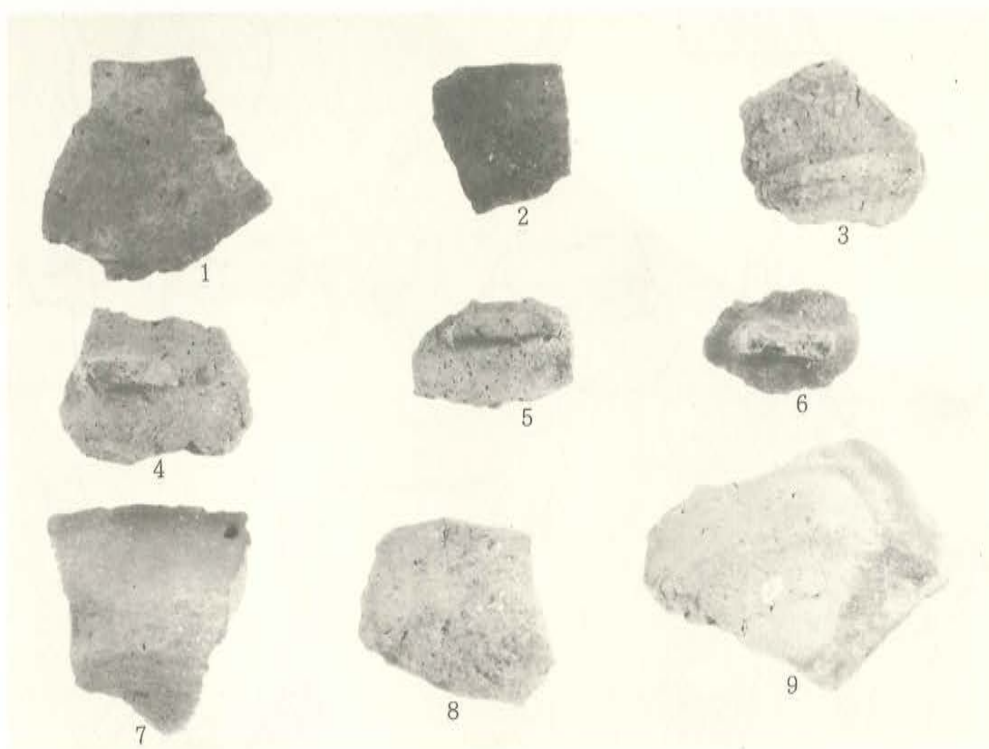
第44図 石垣内採集遺物（1～6：青磁、7・8：白磁、9～16：褐釉陶器）



图版31 石垣内採集遺物



第45図 箕島（ムイズマ）遺跡採集遺物（1～12:石垣内表採、13～17:西側畑地表採）



図版32 箕島（ムイズマ）遺跡採集遺物

3. 高腰城跡

高腰城跡は、城辺町比嘉部落の北方の丘陵上（標高108～113m）に形成されている。

本城跡は、高い山の少ない宮古島の中でも最高所に在り、城跡の上に立つと北に大神島、西に伊良部島、南に野原岳丘陵が眺望できる要所の位置にある。また、城跡の北東部には城主・高腰按司が使用したと伝承される按司ノ^{アズミ}泉（湧泉）が在り、南方約2.2 kmには城主・高腰按司を祀ったと伝えられる高腰神社（御嶽：城跡への遙拝所）がある。

城跡の立地する丘陵は、南東から北北西にかけて舌状に延びており、南東部では馬背状をなして緩やかになっているものの、北側から南西部にかけては急崖をなしている。この丘陵の西側部に城跡としての石積みをもっている。石積みは概ね隅丸長方形をなし、その中に3～4の郭（間仕切り）があり、南側部には城門を持っている（図1参照）。

遺跡の正確な範囲と性格を把握する目的で、1985～1987年度の三次にわたって、城辺町教育委員会によって発掘調査が実施された（盛本編1988, 1989）。

調査によって得られた遺物は、大別して人工品と動物遺体に分けられる。前者は土器が最も多く、次いで輸入陶磁器、類須恵器などがある。その他に、古銭や鉄製品なども僅かながら含まれる。後者では、家畜獣のウシ骨がめだつ。貝類では、シャコガイなどの暖海産大型貝を主としてマガキガイやチョウセンサザエ、イソハマグリ等の中～小型貝なども比較的多く含まれている。魚類では、珊瑚礁内外に棲息するブダイ類やハリセンボン等が含まれるが量的には少ない。

土器は、そのほとんどが口縁部直下に外耳を付した鉢もしくは鍋形器形である。これらは、器形や胎土などの諸特徴からして所謂「野城式土器」（下地1978）と把握されているカテゴリーに含まれるものである。

輸入陶磁器には、青磁、白磁、青白磁、褐釉陶器等が含まれる。これらは、その多くが13～14世紀代に属するもののようである。青磁は無文碗がほとんどであるが、特徴的なものとして劃花文、櫛描文（珠光青磁）、鎬蓮弁文、弦文の碗や皿、内底面に印花文を施す碗などがある。白磁では、玉縁口縁や口禿げの碗が少量含まれる他は、そのほとんどが所謂「ビロースクタイプ」（金武1988）と称されている碗である。この中でも、内底面に櫛搔文を施し、口縁端部をわずかに外反させるⅠタイプは少なく、その多くが内灣する厚手のⅡタイプである。褐釉陶器は、壺と鉢（洗）の二者があるが、鉢（洗）は1点のみで、その多くが壺である。壺の口縁部形態は、端部が玉縁状をなすものがほとんどであり、長方形に大きく肥厚する大型壺はみられない。類須恵器は、肩部に波状沈線文を施すものや、内外面に格子目・羽状等のタタキ痕を有すものなどがある。これらは、概して近年南島におけるこの種の製品の窯跡群として明らかになった徳ノ島のカムイヤキ古窯跡群産（新東・

青崎1985, 新東・他1985)の範ちゅうで把握されるものであろう。鉄製品はほとんどが破片のため、原形については判然としないものの、板状のものは鉄鍋等の破片の可能性があろう。形状の判るものに有茎の鉄鏃?がある。古銭は錆ぶくれがひどく、銘が判然としないものが多い。そのうちの2点には対峙する両端に小孔が穿たれ、垂飾品に転用されていた可能性がある。

以上に簡述してきたように、本城跡は宮古諸島の中でも数少ない石積みをも有す遺跡であることが把握できたとともに、発掘調査によってその規模や構造、築造時期等の一端を明らかにし得た。本城跡を含めた城辺町北方海岸一帯には、立地環境、出土遺物等の諸点で本城跡と類似する遺跡が多い。立地環境としては、その多くが海岸に迫り出すか、若しくはその近傍の独立、または舌状の丘陵台地上に形成されるという特徴を具備している。これらのほとんどは、出土および採集遺物等からして13～14世紀代に押さえられるようである。しかし、ほかの多くの遺跡が丘陵上に立地し、時期的にも本城跡と概ね並行関係にあるものの、これまでに述べてきたように石積みをも有する点では異なる。時期的にも並行関係にあり、かつまた同様な立地環境にありながら、このような石積みの有無という差異は何を示唆しているのであろう。今後の研究を要するところである。

また、問題点として、グスクそのものの縄張り構造や周辺遺跡との関係などについても考究していかなければならないことは多言を要しないであろう。さらに、その形態構造上の沖縄諸島や八重山諸島域との比較をも要求される。

<参考文献>

金武正紀、1988：ビロースクタイプの白磁碗について。貿易陶磁研究。N0.8。P148～157。

日本貿易陶磁研究会。福岡。

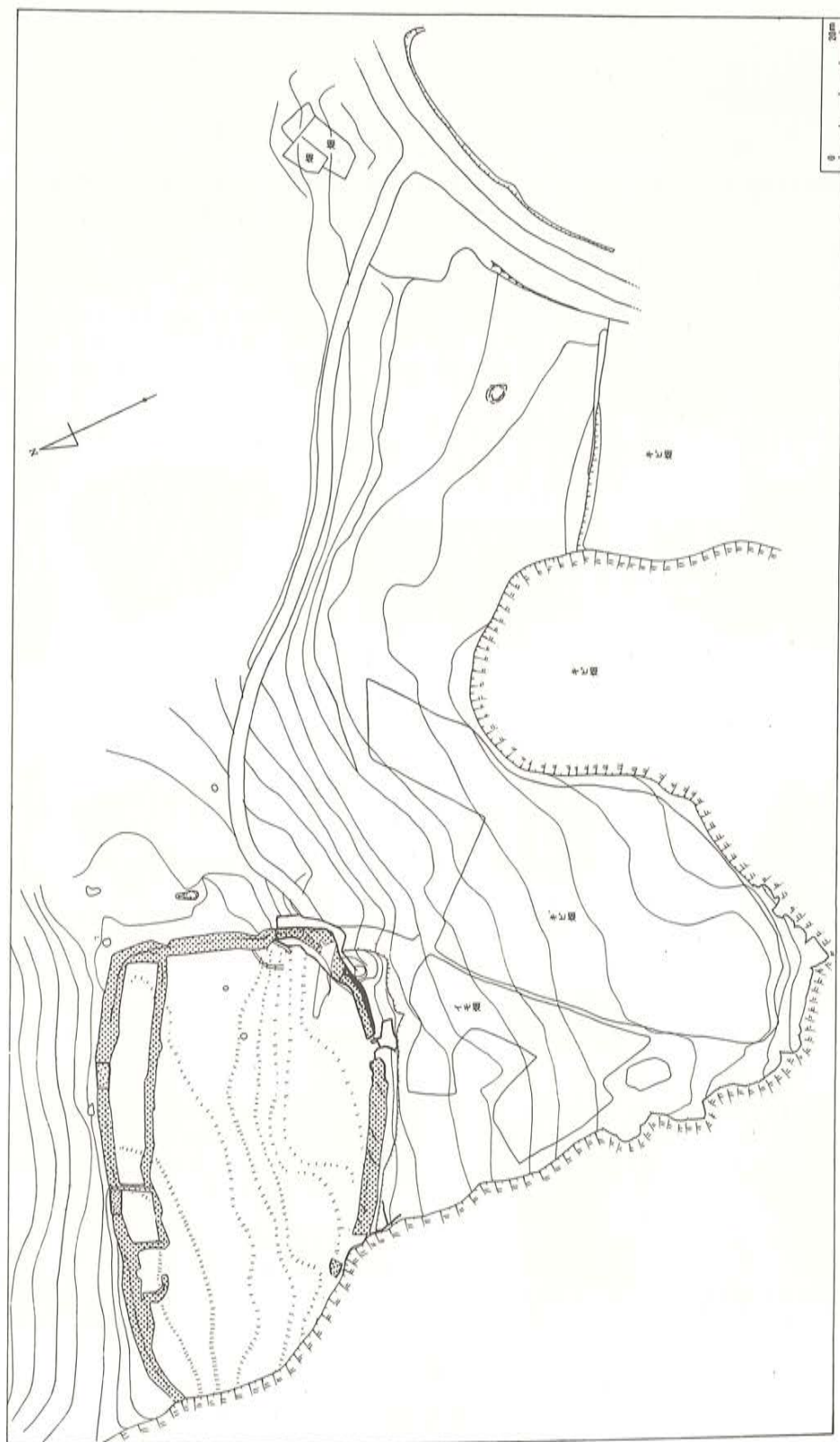
下地和宏、1978：野城（ぬぐすく）式土器について。琉大史学。第10号。P34～49。琉大史学会。那覇。

新東晃一・青崎和憲、1985：カムイヤキ古窯跡群Ⅰ－昭和59年度重要遺跡確認調査－。伊仙町埋蔵文化財調査報告書(3)。伊仙町教育委員会。鹿児島県伊仙町。

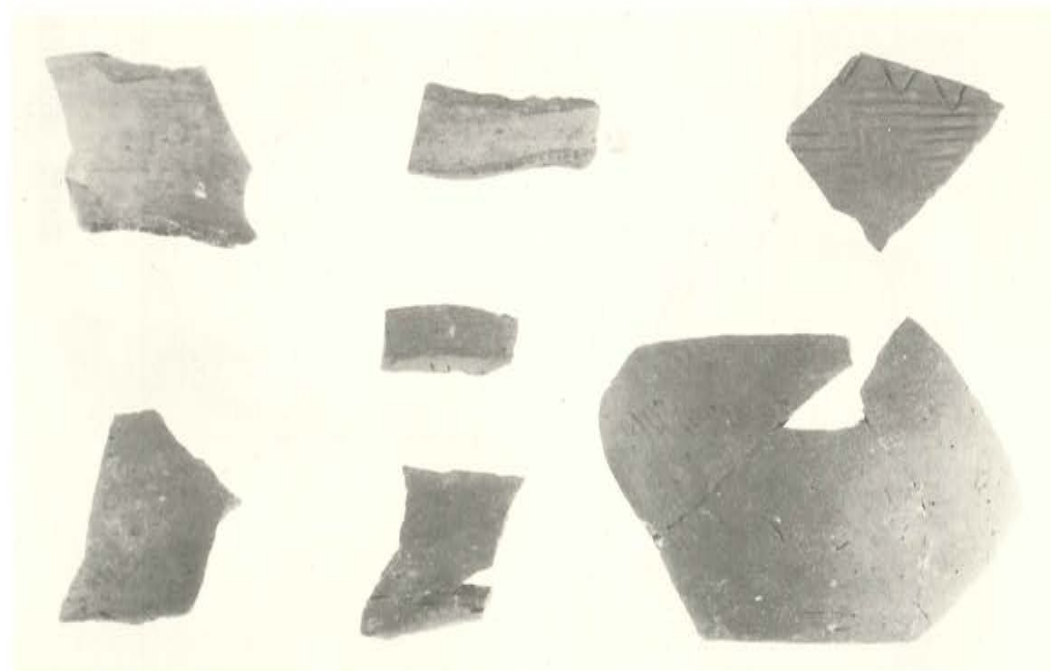
新東晃一・他、1985：カムイヤキ古窯跡群Ⅱ－ため池等整備事業（木之又地区）に伴う発掘調査－。伊仙町埋蔵文化財調査報告書(5)。伊仙町教育委員会。鹿児島県伊仙町。

盛本勲・編、1988：高腰城跡範囲確認調査概報。城辺町文化財調査報告書第3集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。

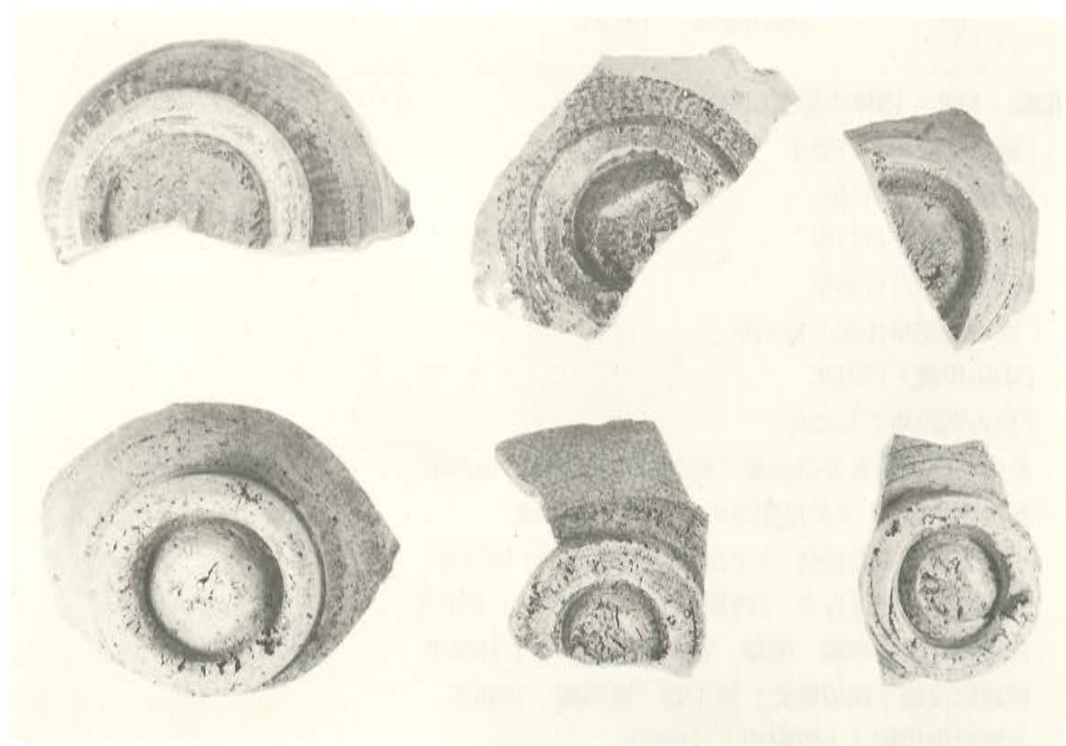
——、1989：高腰城跡－範囲確認調査報告書－。城辺町文化財調査報告書第5集。城辺町教育委員会。沖縄県城辺町。



第46図 城辺町高腰城縄張り測量図



図版33 上、土器
 下、類須恵器



図版34 白磁碗（上：ピロースタイプ、ほか、下：底部）

宮古グスク関係文献一覧

調査報告

- 沖縄大学沖縄学生文化協会編 『郷土』池間島調査報告 第5号 1967年
" " 狩俣・島尻調査報告 第9号 1970年
" " 砂川・宮国・久松調査報告第11号 1972年
" " 友利・新里・砂川調査報告第12号 1973年
高元政秀・友寄英一郎 「上の頂(ウイヌツズ)遺跡調査概報」『琉大史学』第4号 1973年
沖縄大学沖縄学生文化協会編 『郷土』来間島調査報告 第13号 1974年
砂川元島調査団 『宮古島砂川元島遺跡発掘概報』一次 青山学院大学 1975年
" " 二次 " 1976年
城辺町教育委員会「マムヤ井遺跡」『城辺町の社会教育』 1979年
上野村教育委員会『宮国元島』 1980年
城辺町教育委員会『城辺町保良地区の遺跡分布』 1980年
平良市教育委員会『平良市の文化財』 1981年
沖縄県教育委員会『住屋遺跡緊急発掘調査報告』 1981年
" 『宮古の遺跡』 1983年
城辺町教育委員会『大牧遺跡・野城遺跡』一範囲確認調査報告一1987年
" 『高腰城跡範囲確認調査概報』 1988年
" 『砂川元島』 1989年

旧記、村史、団体の調査記録等

- 『御嶽由来記』1705年
『球陽』 1745年
『雍正旧記』1727年
『遺老説伝』1745年
「宮古島記事仕次」1748年
『中山世鑑』1701年
『宮古島記事』1852年
多良間村史編纂委員会編『村誌 たらま島』1973年
多良間村役場『多良間島の文化財』1974年
平良市史編纂委員会『平良市史』第1巻 1979年
野原民族芸能保存会『野原のマストリヤー』1981年
沖縄県立博物館編 図録 特別展『グスク』1985年
城辺町役場『城辺町史』第1巻 資料編 1985年
上野村役場編『上野村史』 1986年
宮古郷土史研究会 シンポジウム「稲村賢敷と宮古研究」『宮古研究』第5号 1989年

論文、総論、その他

藤田豊八 「琉球人南洋通商の最古の記録」 1971年

慶世村恒任『宮古史伝』 1972年

稲村賢敷 『宮古島史跡めぐり』郷土研究会 1950年

“ 「琉球諸島における倭冠遺跡の研究」 1975年

“ 『宮古島庶民誌』 1957年

“ 『宮古島旧並史歌集解』 1962年

金子エリカ「久松の巨石墓」『沖縄文化』第5巻 第3・4巻 1967年

宮古民俗文化研究所編 『南島』第三巻 1969年

金子エリカ・ヘルベルト・メリヒヤール『保良元島遺跡』asian and pacific archaeology No4

下地 薫「倭冠遺跡か貿易遺跡か」『琉大史学』第4号 1973年

大川恵良「伊良部郷土史」 1974年

安里 進「沖縄陶器の影響を受けた宮古式土器について」『やちむん』第5号

砂川明芳「宮古の古代への一つの探求—密牙古の正体をめぐって—」『史学雑誌』1975年

“ 「宮古島郷土史考」 第1部 1976年

“ 「邪馬台国へのアプローチ」 1977年

下地和宏「野城式土器について」『琉大史学』第10号 琉大史学会 1978年

“ 「宮古島の土器文化—その時期区分について—」『宮古研究』創刊号 1978年

宮国定徳「宮古の石工技術の発達について」『宮古研究』創刊号 1978年

仲宗根將二「慶世村恒任の宮古研究について（試論）」『宮古研究』創刊号 1978年

上地盛光『宮古島与那覇邑誌』 1979年

中間井左六『宮古お嶽集』 1980年

下地和宏「かあんつ村の遺跡 同部落の形成課程に触れて」『宮古研究』第2号 1981年

“ 「宮古の古代社会—倭冠の問題を中心に—」『青い海』第11巻4号 1981年

砂川明芳『宮古島郷土史考』第2部 1981年

宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図』考古編 1983年

下地和宏「新腰の女按司について」『宮古郷土史研究会会報』 1984年

“ 「考古学にみる宮古」『新沖縄文学』61号 沖縄タイムス 1984年

下地利幸「金盛・那喜多津兄弟のこと」『地域と文化』第20号 1984年

金子エリカ「保良遺跡発掘20年後」『沖縄文化協会』64 1985年

下地和宏 沖縄「グスク時代の宮古」『おきなわ文化協会66』1986年

砂川明芳「宮古島郷土史考」第4部 1986年

下地和宏 沖縄「グスク」の宮古・八重山 63号 1987年